

# 命かけた二つの祖国

村山 悠基雄

沼袋三丁目

## 情報要員として潜水艦で出航

昭和十七年六月五日前後に亘る、わが海軍のミッドウェー作戦の蹉跌は、わが国のその後の作戦進展に底知れぬ暗雲を漂わすに至った。若しこの海戦において、四隻の空母、並びに多数の艦艇、輸送船、三〇二機にのぼる航空機を一挙に失うという惨事がなかつたならば、われわれ軍司令部所属の、米国生まれの情報関係要員は、速やかに同島に派遣される予定であったことを知ったのは後日のことであつた。

ところが彼<sup>ひが</sup>私の作戦活動の優劣は逆転し、外南洋と呼ばれる赤道以南の広大な地域であるソロモン、ニューギニア方面の戦局は急を告げ、私も急拠六艦隊（根拠地トラック島の潜水艦部隊）所属の第七潜水戦隊（イ号一―七号艦）の指揮艦、イ七号に乗艦の命を受けた。

いよいよ九月七日、横須賀の空には一片の雲もなく、私は狭い艦上で、「今度こそ、祖国との別れ」となることを覚悟して、快調に響くエンジンの音を聞きながら、観音崎を右に回り、富

士山の姿が遠く水平線の彼方へ見えなくなるまで、艦上の片隅に立ち尽くしていた。

狭い艦上には不釣合なとも見られる、砲身の長い十四センチ砲二門が並び、又連装の高射機関銃が揃い、艦橋の後部には複座式の水偵察機一機を分解して搭載する円筒型のタンク二本と、これを発射するためのカタパルト及び偵察機が帰還した時、これを収容するためのデリックなど、意外と艦上搭載物も多い。又この格納庫には、「的」などと呼ばれた特殊潜航艇が積まれた時もあった。

イ七号は、司令少将以下約百二〇名の大世帯であり、朝日新聞からの報道班員、水上機要員二名、軍司令部からは、私が情報通信要員として乗り込んだ（艦は十八年六月二三日キスカ沖にて雷撃を受け、一九五〇トンの姿を没したのであった）。

私の担当する短波無線放送の傍受は、ただでさえ狭くて熱い通信室の片隅を占領し、艦が水上航走中のみ電波が取れる。一晚中欧米の電波を取っていても、急に電波が立ち消えとなった

り、或いは近隣からの妨害電波など数え上げれば限りもなく、又迂濶にも自分から電波を出そうものなら、四方八方から狙い撃ちにされてしまう。

横須賀を出航して十数日過ぎたある朝、当番兵が「早く食事をして下さい」と起こしにきた。夜も昼もつけ通しの扇風機の下から、<sup>うすたか</sup>堆く積まれた食料を踏み越えて食堂へ出た。そこで森本軍医長から「盲腸患者が出たが、現状ではラバウルへ帰る余裕もない。皆さんの手を借りて手術を行うので応援して頂きたい」との言葉があり早速応急手術。軍医はゴム手袋の用意もなく、われわれが患者の手足を押さえて、「軍医長ノ殺せノ」と怒鳴り続けて手術を終わったのは哀れであった。この兵曹は七潜の艦上で盲腸の上には厚い腹帯を巻き、元氣よく砲身を磨いていた。彼も母港に着けば陸上勤務となるであろう、とそんな思いが私の頭を過ぎった。

### ガダルカナル島の飢餓

連合軍上陸以来、彼我陣地の争奪戦は激甚であった。中部ソロモン諸島のガダルカナル島の北端、ルンガ岬地区海岸に陣地を守り続けている海軍部隊を援護激励のため、イ七号艦は、夜陰に乗じて岬近くに浮上し、衛生資材等の緊急揚陸を実施した。その時連絡要員等には、銀飯で作られたおにぎりが大きな<sup>ざる</sup>筥に山盛りに用意されていた。これを見た連絡兵は「銀飯など、もう何か月も見えておりません。戦友たちのところへ、貰ってゆけ

ますか：」と涙ながらに訴えていた。ソロモン、ニューギニア周辺の飢餓戦線に続いて、インパール、比島の平原作戦へとつながる、苦しい戦いへの前兆となったのであった。

イ七号は夜の明けぬ間に、ガダルカナル島の惨状に心を残しながら、更に南下の足を早め、豪州やニューギニア、ソロモン方面への補給基地エスピリットサントの北端にある飛行基地の砲撃に向かった。十月四日薄暮過ぎ、敵の中継基地に肉迫、暗夜の飛行場上空に対し、数個の曳光弾が次々と発射され、これに向かつて二連装十四センチ砲の実弾がすさまじい勢いで基地に炸烈、一部地点では火災を起こした。このとき戦果を確認すべく、搭載の複座式水上偵察機が、カタプルト上から発射されていたが、同機の帰投と同時に、わが艦の後方より、敵単発機の奇襲を受ける破目となった。ところが偵察機収容のデリック不具合のため、愛機を自らの手で撃沈し急速潜航した。しかし先の敵飛行機はわが艦に至近弾数個を投下、潜水艦はビリビリと音を立てて振動し、艦全体が大地震のようにユラユラと揺れた。艦は安全潜航震度である一〇〇メートルの赤線を超え、ゲージは一二〇メートルの線を上下してブルブルとふるえており、平素はあまり水のさすこともない艦の鉄の継ぎ目からは、初め少しづつ漏水していたものが次第に増え、ほぼ直角に近く差してきたには、ズブの素人で呑気な筆者もただごとでないものを感じた。電信室の当直者は勿論、全乗組員が非常配置につい

て居り、筆者も椅子から投げ出されたときの小さなこぶは今でも傷跡の一つとして、その頃を思い出させるためにうずく。

### 山本長官最後の宿舎に入る

十八年夏暫く東京で勤務していたが、次はラバウル行きと決まった。出発の前日午後新橋駅頭まで見送りに来てくれたのは唯一人、軍令部三部の立花止中佐であったが、私一人のための見送りに謝意を述べた。中佐は、余り浮かないような顔をしたと思うと、「もう、ほとんど勝ち目はないんだよ」と、頬を横に向けて呟く姿には、心なしか一抹の寂しさが窺えた。

明けて八月四日朝七時、横浜の水上基地を離れた四発川西製二式大艇は、三〇名の要員を乗せ、三〇トンの巨体を悠々とほばたいた。途中サイパン、トラックの基地で翼を休め、三日目の午後早めに、機は大きく右にバンクしたと見る間に、ラバウルの活火山に隣接する水上基地に着き、直ちに椰子林の奥の南東方面艦隊司令部に案内された。

司令部入口左側の小綺麗なバラック、六部屋の一番奥まった部屋に通された。後刻見えた副官が妙なことを言われた。

「この部屋は、どういう部屋かご存知ですか。ここは山本長官のために造られ、そしてここが最後となったところです」

こう言われて、電気刺激を受けたように私の脳裏をかすめたもの、それは去る四月十八日、前線の将兵を激励するためラバウルに飛来した連合艦隊司令長官、山本五十六大将の空戦死で

あった。山本長官は更に南下し、ブーゲンビル島方面に進出を企図したが、わが軍の作戦暗号は解読されていた。筆者は十月初め、突然の配置替えでニューギニア地区情報担当からソロモン、ブインに転属となり二六航空戦隊司令部に急派された。この時も長官と同じ一式陸上攻撃機に十名程で乗組んで、ブインの基地に飛び込んだ。が、やはり米軍に発見されていたのだ。余談であるが、若しわれわれの機が被弾する時は、七ミリの旋回機銃は、筆者が操作することになっていた。

ブインには、第二五及び二六航空戦隊の精鋭（両者共戦闘機隊）がいたのだが、十一月三日、敵はブインの裏側タロキナ地区に大挙上陸し、われわれは進路も退路も完全に閉ざされ、何百人かを乗せた宇治川丸にてブインからの脱出を計った。しかしキエタの湾口で、敵の朝の偵察機に捕捉され、アツという間に爆撃、銃撃の巷と化した。泳ぎに自信のない為、最後まで小さなカッターにつかまっていたが、夕暮れ迫る頃救助隊に救われた時は、腹帯の中には英語の辞典一冊と靴一足だけが身についていた。

### 敵機の猛襲いよいよ急

十八年十一月末には、ブーゲンビル島キエタ湾で、乗船宇治丸丸が爆沈され、島の北端ブカまでは道路らしいものが全くないジャングルの中をお互いを短い紐でつなぎ、励まし合っていた。道路もなく、夜陰を利用して中年の現地民を案内者とし

たが、集落毎に話し言葉も異なり、現地語もピジョンイングリッシュも通じない時もあった。

十二月初め、駆逐艦で漸くラバウルに運ばれたのであったが、疲れ切った五体は悪質な Dengue 熱、マラリアに蝕ばまれ、意識不明となり十日余の入院となった。こんな時でも看護婦達は空襲の都度、われわれ重症患者をかついで壕に退避させてくれるのであった。

十八年十一月、ブーゲンビル島のタロキナ地区に上陸した連合軍は、十九年二月からは、ラバウルを飛び越して、その北方五百キロメートルのアドミラル諸島(マヌス島)、更には一挙にトラックなど中部太平洋に対し熾烈な「蛙飛び作戦」を展開していった。

#### ラバウル、ブイン方面への来襲機数

地区	ラバウル	ブイン
十八年九月		六〇二
十月	三九〇	一三八四
十一月	五二二	
	(一、五次)	
十二月	(連日大挙)	
十九年一月	一八二一	
二月	九五九	
三月	九八〇	

以上は、来襲機の概数であり、前記の外大編隊の来襲は連日の如くであった。退院した私は、連日空襲の激しいラバウルの中心地を避けて、ブナカナウの連合飛行部隊に勤務し敵側の無線傍受に努めていた。しかし十九年二月七日、米機動部隊は、わが本土以外では最大の基地トラック島を強襲して来た。わが方は、外南洋一帯の全航空兵力を挙げ、中部太平洋方面を増援したが、二月二〇日トラック島に向け飛び立った最後の海軍機は、戦闘機三七機、艦上爆撃機四機、艦上攻撃機五機、陸上攻撃機二機に過ぎず、ラバウル航空隊の幕は降ろされたのであった。

ガダルカナル島の撤退時より一か年間に、わが海軍の損失は七百機に達し、余りにも大きく、且つ悲しい犠牲であった。

#### 爆風で年貢の納めどき

二〇年六月、友軍の基地、飛行場ともに連日、敵機の狙場であることには変わりなかった。私も敵側無線情報傍受に、ゆっくり休む暇もなかったが、午後の空襲で防空壕に至近弾を受けた。その爆風のため、夜半に至り腸閉塞の疑いにて、急拠クモの巣や埃だらけの防空壕の中の急ごしらえの手術場で開腹手術を受けた結果、S字状結腸の捻転も併発していたのであった。六時間に及ぶ大手術も、肥留川中佐等軍医四人の尽力のお陰であった。厚い腹帯の下の傷跡は、正中切開と呼ばれ、われながら大きな傷跡に驚いた。後の二二年の春秋二回、腸管癒着をお

こし、これをとるための手術を行った。

終戦後、米国を訪れたとき、サンフランシスコの練兵場や金門海峡を渡り、太平洋に面した断崖に多数の砲台を見て廻ったが、其処には、一台の六輪貨車もなく、海を望む望楼には、一基の小型砲さえ置かれてなかった。砲台の全ては綺麗に片づけられており、窓枠には僅かに夏草が枯れ細っているだけであった。

この姿こそ、終戦の実感を伝えてくれるものであった。

